

## 編集後記・奥付

雑誌名	真実心
号	36
ページ	165-(169)
発行年	2015-03-10
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1108/00000482/">http://id.nii.ac.jp/1108/00000482/</a>

## 編集後記

『真実心』第三六集が出来上がりました。二六年度も宗教講座は五回行われ、意義深いお話で多くの学びがありました。そのご講演を『真実心』にまとめました。今、世界で・日本で、衝撃的な事件が起きています。改めてご講演を振り返ってみたいと思います。

1 「ネパールの人々に寄り添う」(横尾美智代先生)は、先生がネパールでのご自身の体験をもとに、宗教の意味についてお話しくださいました。その中で、これまでの世界観が根底から覆されるような事態に人が直面し、思い悩む時、何千年もの間伝わってきた宗教の教えの中に手応えのある答えが見つかるのではないかとご教示くださいました。

2 「仏教伝来とその周辺」(宮崎健司先生)は、通説では六世紀とされる日本への仏教伝来当時の人々やその意味についてのお話しでした。

仏教は、その思想だけでなく、ともに伝えられたテクノロジーも含めて当時の日本にとつて大きな「カルチャーショック」であり、仏像制作や経典編纂の技術に加え、壮麗な寺院建築のインパクトは、今日のアベノハルカスの登場に匹敵する（あるいはそれを上回る）ものであったのではないかと話されました。また、最新の外交・医術などの知識をもったエリートでもあった僧侶らにより伝えられた、それらの「先進技術」を受容することが国家的命題だった当時の社会情勢やその時の人々の様子を想像させてくれるお話でした。

3 「豊かな人間性を目指して」（富岡量秀先生）は、先生が幼児教育、「そだち」という観点から宗教的なものの見方の大切さについてお話くださいました。そして、いのちの不思議に驚嘆し、自分という存在があらゆるものとながり、生かされてあることに気づくことが、人生に対する真摯な態度、豊かで広い心に繋がっていくことを教えてくださいました。

4 「思いやりの脳内機序」（渡辺俊之先生）は、本学の校訓「真実心」——おもいやりのこころ、他者への配慮、ともに支えあうこころ——について科学的な観点からお話し

下さいました。前頭葉と側頭葉の中に入り込んだ島と呼ばれるところが我々の「共感」、人の痛みとか悲しみ、不安を共感する重要な働きをしていると脳内の解剖学とその働きを詳しく説明されました。そしてこれらの科学的解明が、高齢社会の中で大きな課題である前頭側頭葉型認知症の症状の改善にも有効な治療薬としての開発につながっていると伝えてくださりました。

5「仏の願い、私の願い」(木越渉先生)は、今まさしく私たちが考えなければことだと思いません。

先生は、お仏壇に供えられる仏具について、ろうそくの光は如来の智慧、お香の香りはすべてのものを包み込む如来の慈悲、そして仏花は一つの器の中に違う色の花がちやんと収まるという浄土の徳を顕している。すなわち全てのものがバラバラでありながら一緒でもあり、その違いを認めることができる世界こそが浄土の姿であり、仏壇に込められた意味であると話してくださいました。しかし我々の世界では、違う色のグループを馬鹿にしたり羨んだりしている。戦争もそうです、と触れられた上で、仏花が一つの器におさまる―人々が違いを認め合い、ともにあることのできる社会と

なる―ためには、我々が「自身を知る」ということが不可欠です、と指摘されました。

今、中東でおきたイスラム国による日本人誘拐殺害事件が報道されています。戦火の中に生きる人々の現実を伝えようとしていたジャーナリスト・後藤さんたちが巻き込まれた今回の事件は、異なる社会・文化・宗教がともにあることの困難さと、「宗教とはなんなのか」という問いを改めて私たち一人一人に投げかけてきます。

最期に先生は、私たちが「自分の愚かを知る」―人間のいちばん深い所にある悲しみや痛みというものを大事に抱えることが出来る世界を歩ませていただいている、このことこそ我々が宗教を、そして仏教を学ぶ意味なのではないでしょうか、と結ばれました。

今、私は宗教や社会について、このように教えていただける世の中にいられることを大変有難いことだと思っています。

（編集委員会）